

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市 鍋木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ	七草粥に思う -----	清澤 瞳子	生まれること産むこと	奈良 扶規子
3 ページ	藤沢周平を楽しむ -----	江尻 秀夫	仕事 -----	芦野 学

新春に寄せて

佐倉市長 藤 和雄



とも新しい市民文化の一翼を担っていくことをご期待申し上げます。

私は、市長に就任後、四度目の春を迎えました。この間、市民の皆様から温かいご支援、ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

さて、二〇一〇年を振り返りますと、佐倉城を築いた土井利勝が佐倉の領主となつて四〇〇年となることから、「佐倉・城下町四〇〇年」として、多くの方々の参加を得て、各種事業を実施しております。また、ゆめ半島千葉国体が開催され、多くのアスリート達が全国から佐倉市に集い、市内が多いに賑わいました。二〇一一年は、佐倉草ぶえの丘バラ園を会場に「国際ヘリテージローズ会議」が開催されること、海外二

〇力国及び国内から計二七〇名の方が参加を予定しており、国際色豊かで、華やかな行事になります。この会議の他にもあらゆる機会をとらえ、佐倉市の魅力を広く市内外に向けて発信し、今後の発展につなげてまいりたいと考えております。

今年の干支の「卯」は、動物にあると「兎」でございます。兎にあやかり、佐倉市がますます躍進する一年となりますよう、市政運営に力強く取り組んでまいりますので、皆様のより一層のお力添えを賜りますようよろしくお願い申し上げます。

結びに、本年も皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

新年おめでとうございます。市民の皆様におかれましては、心健やかに新春をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。
『なかま』にご投稿されている皆様や編集に携わっている方々のご努力に深く敬意を申し上げますとともに、市民の皆様の意見交換と情報提供の場として、『なかま』が今後



七草粥に思う

我が家の「七草粥」は、冷蔵庫の野菜庫から、七種類の野菜をさがし、それを粥に入れて煮込み「七草粥」と称していたが、今年は違った。

暮に購入したお正月用品の一つとして、一斗程にカットされた乾燥七草が、透明のビニール袋に入り、袋には、七草粥の由来や、調理？法等が印刷されていた。電気がまだ炊いた粥の中に、袋をカットして乾燥七草を入れ、よく混ぜ数分ふたをしておく。やがてそれなりの香のする「七草粥」の完成。いとも簡単。

正月七日に食する「七草粥」は万病に効き、また邪気を除くと伝えられ、一年の健康を祈り食すると言われている。「芹齋 御形 繁蔓 仏の座 松蘿蔔 これぞ七草」と詠まれている。

春の七草を炊き込んだ七草粥の起こりは、平安初期、中

国から伝わったとされている。

「春日野に若菜摘みつつよるづ代をいはふ心は神ぞ知るらむ」(素性法師)

七種の若菜なので、七種

(ななくさ)と書くとも言う。

芹(セリ科多年草)

齋(アブラナ科、ペンペン草

で知られている)

御形(キク科八八草)

繁蔓(ナデシコ科ハコベのこ

と)

仏の座(キク科タビラコ・シ

ソ科のホトケノザは別)

松(アブラナ科カブ)

蘿蔔(アブラナ科ダイコン)

秋の七草は、花の姿や色の

美しさを鑑賞するものを集め

ているが、春の七草は、春の

香を味わい楽しむもの。

冬の散歩道で、春の七草の

幾つかに会うと、心のふるさ

とに会ったような、なつかし

さと、うれしさで一杯だ。

(井野 清澤瞳子)

生まれること

産むこと

私には三人の子供がいます。それぞれの誕生について、不思議な経験を語らせていただきます。

第一子を妊娠した時、この子は私の母の生まれ変わりだと直感しました。私の母は、八年前に亡くなっていました。

母の命日は一月二三日。そこで私は「おばあちゃんの生まれ変わりなら、一・二・三日の日に生まれておいで」といつもお腹の赤ちゃんに話しかけていました。何と予定日を八日過ぎて、一二月三日に生まれてきました。

第二子を妊娠した時、予定日が三月三十一日と言われました。それでは長男の入園式に出席できません。私は、「お兄ちゃんの入園式に、ママは出席したいから、それまで待っていてね」と言いきかせました。四月九日に着物を着て

無事出席し、「お兄ちゃんの入園式が終わったから出てきていいわよ」とお腹の赤ちゃんに言う、次の日に生まれてきました。

第三子には、「好きな時に生まれておいでね。でも、家族皆がおうちにいる時にね」と言っていたら、夜、全員が寝ている時に、陣痛が始まり、すぐに破水して、自宅の寝室で、お兄ちゃんとお姉ちゃんに見守られながら、父親の手の中に、元気に生まれてきました。出産予定病院は、車で五分ですが、行く間もありませんでした。へその緒が付いたまま救急車で運ばれました。夜中に駆けつけて来てくれた義父母、救急車のサイレンで迷惑をかけた近所の方々、迅速に対してくださった救急隊員やお医者さん、助産婦さん。励ましてくれた息子と娘。そして、私と次女の命の恩人、主人に感謝します。

(中志津 奈良扶規子)

藤沢周平を楽しむ

藤沢周平の作品に魅せられた人はまわりに大勢いる。私もその一人となったが、彼の作品に夢になつたのは還暦を過ぎて時間の余裕ができてからである。

東北の小藩、海坂藩うなさかの下級武士や江戸下町の庶民たちの人生の哀歓を綴つた彼の作品は、美しい日本の季節の風景描写も合わさって、心の奥底を揺るがすほどの清々しさをもたらしてくれる。日本人だからこそ得られる共通の感動であろう。

登場人物もごく普通の人間であり、読む者は親近感を常に抱き、思わずわが身の生き方と重ねてしまうほど現代に通じる。彼の作品全体に感じることが、登場人物に対する作者の温かい眼差しである。繰り返し読むと味わいがますます深まる。

さらに、毎年のように藤沢

作品が映画化され楽しみが増した。すべて海坂藩を舞台にしたものである。『たそがれ清兵衛』『蝉しぐれ』から、『武士の一分』（原作は『盲目剣返返し』）『山桜』（佐倉武家屋敷などで撮影）と続いてきた。昨年も『花のあと』などが公開され、今年初夏には八作目となる小品『小川の辺』があるようだ。

藤沢周平の無駄のない文章と、その行間にある世界を如何にして映像化するか、映画監督たちの手腕や演じる俳優たちの技が楽しみである。クスツと笑うのも、ちよつと涙するのも、余韻を楽しむのも一人で観るのが良い。

さて、今宵もまた時空を超えて海坂城下染川町の飲み屋「砧屋」きぬたにでも出かけてみようか。『蝉しぐれ』の牧文四郎と酒を酌み交わすことができるかも知れない。

（染井野 江尻秀夫）

仕事

現役時代は金融関係の仕事をしてきたが、定年後は、かねてからこれとまったく違う体を使って汗をかく仕事を地元でしたいと思い、四年前からシルバー人材センター（以下シルバーという）の植木職として働いている。

当初は近所で一人住まいのお年寄りが多く、植木の剪定や手入れに困っている人には、ボランティアでお手伝いをしてきた。しかしながらボランティアではお年寄りに気づかすいをかけることになり、かえって迷惑になつていことに気がつき、安い料金でできるシルバーでの仕事を始めたのである。

私はもともとこれといった趣味もなく、植木の仕事をしている時が一番楽しい。木をどのように剪定するかを本などで調べるとともに、木には一本一本個性があり、庭も一

軒一軒違うので全体の雰囲気を考えながら、仲間とも相談し構想を練る。構想通りにできたときが一番嬉しい時である。しかもお客さんから喜ばれ「また来年もお願ひします」と言われたときは最高の喜びで疲れも吹っ飛ぶ。

また植木職の仕事は健康のためにもなっている。私の血圧は150/160あったのが、この仕事を始めてから最近では130前後に改善し、血糖値も良くなつてきている。一緒に仕事をしている仲間は糖尿病であったが、最近では正常値近くまで改善し、医者も驚いているそうである。

このようにシルバーで働くことは、仕事の仲間やお客さんなど地元での知り合いが増える。しかも健康のためにも良く、多少の収入もあり、良いことづくめである。シルバーで一緒に働きませんか。

（大蛇町 芦野 学）

1月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

わくろ道

十一月の初旬、NPO法人が主催する本佐倉城跡見学会に参加し、遺構に足を踏み入れた。本佐倉城は京成大佐倉駅から徒歩5分、北は印旛沼、周りを下総台地の谷津に囲まれた要害の地に、千葉氏が文明年間（室町時代後期）に築城した由。城山の中心部に残っている主殿や会所跡に立つと、凜とした晩秋の空気の中から、戦国武将

の宴のざわめきや、息遣いが聞こえてくるような気がした。

午後からは、城跡周辺を散策し、『なかま』十一月号の投稿原稿にあった「桔梗塚」や「勝胤寺」を実際に訪れることができ、感慨深いものがあつた。

本佐倉城や千葉氏については、未だに良く判っていないことが数多くあるとのこと。今後進められていく発掘調査に期待したい。

（田村孝則）

あとがき

昨年の六月から『なかま』の編集委員として参加しています。

編集委員会では、皆様から投稿された文章の誤字、脱字、句読点、送り仮名、用語等をチェックし、できる限り、理解しやすい文章にする作業を行っています。

投稿された文章を見て、いつも感心させられるのは、日々の経験や思いを実に素直に文章に

まとめられていることです。

絵の好きな人は絵で、俳句の好きな人は俳句で、方法は違っても、それぞれの方法で、自分の思いを表現し、他の人に感動や喜びを与えるものを、形に残すことは大変素晴らしいことと感じます。

『なかま』発行の狙いは、市民の方々に、紙面をとおして情報交換の場を提供することです。是非、多くの方が、ご自分の経験や思いを投稿して頂ければと思います。

（坂本初男）